

MGCP

Media Gateway Control Protocol:キャリアがIPテレフォニーサービスを提供する際に利用されるプロトコル。既存電話網における中継交換機の機能をIP網に代用させるといった特徴を持つ。制御機能とメディアストリーム制御機能を分離、スケーラビリティの向上を図ることを可能としている

IP-PBX

IPプロトコルに対応したPBXで、VoIPによる音声・データ統合のほか、LANとの共存やコンピュータ、アプリケーションとの連動を実現する。現在、IP-PBXは大きく、サーバーインクルード型、PBXのIPトランク内蔵型、IPゲートウエー型の3タイプがある。

ネットワーク提案でもアプリが主役に 音声の世界に情報系SIが攻めてくる

パート1で述べたように、WindowsXP登場のインパクトを受け、キャリアにおけるSIP対応は着実に進められている。こうした動きを捉え、国内外の通信機器メーカー各社でもSIPに対する取り組みを急速に進めている。

先行したのは、やはり海外ベンダー勢だった。

シスコシステムズはSIPの重要性を認識し、いち早く自社製品への実装を進めてきた。IETFのSIPワーキンググループにも設立当初から参加し、相互接続のベンチマーク用の機器開発も行ってきた。

現在、同社では、アクセスサーバー製品である「AS5800/5300シリーズ」のほか、ルーター製品である「Cisco 2600/3600」シリーズを含むいくつかのプラットフォーム上において、IOS Release12.1(5)T以上からのSIPのサポートを行っている。さらにキャリア向けに「Cisco Sip Proxy Server (CSPS)」をリリース、国内でも販売に向けて準備を進めている段階だという。

マーケティング統括本部サービスプロバイダーマーケティング本部の木下剛本部長は、「WindowsXPとの接続性についても、2年前からマイクロソフトと相互に検証を進めてきており、

自信を持って顧客に提案できる状況にある」と説明する。先出のデルタ3やダイヤルパッドへ同社のネットワーク製品が導入されたことから、相互接続性は実証済みといえるだろう。

ルーセント・テクノロジーでもSIPに対するソリューションを展開している。公衆回線との接続を行うメディアゲートウエー製品におけるSIPサポートを進めており、既存のVoIPメディアゲートウエー「MAX TNT」、「APX8000」（すでにH.323はサポート済み）に加え新機種「APX1000」などにも実装を進めていく計画だ。さらにコンバインドサービスプラットフォームと称し、プログラマビリティ及びAPIを兼ね備えた「EXSシリーズ」のほか、ソフトスイッチにおいてもSIPのサポートを強化していく。日本ルーセント・テクノロジーの安田欣只エンジニアは、「私どもはサービスプロバイダーが収益をあげるためのネットワーク構築の実現に主眼を置いた製品開発を進めており、その手段の1つとなるSIPには力を入れている」と強調する。

またソナス・ネットワークスでも、アクセスサーバー製品「ASXシリーズ」、オープンサービススイッチ「GSX9000」等においてSIPのサポートを行っている。日本ソナス・ネット

ワークスの松村淳也シニアシステムエンジニアは、「キャリアはユーザーからの多様なアクセスニーズに応えるため、VoIPサービスに関しても複数のプロトコルへの対応を進めている。当社でもこうしたキャリアの動きを捉え、SIPのみならず既存のH.323やMGCPなどさまざまな要望に対応する機器の開発を進めている」と語る。

では、国内メーカーの取り組み状況はどうか。

NECではメディアゲートウエー製品「CX6800-CA」においてSIPをサポートしている。また、IP-PBX製品「APEX7600i/3600i」でもSIPへの対応を進めていく構えだ。

沖電気工業では、今年6月に発表したキャリア・マルチメディア・コミュニケーションサーバー製品「Center-Stage」での対応を実現している。ネットワークシステムカンパニー情報通信ネットワーク事業部ソリューション第一部の千村保文部長は、「基本的にSIPについてはセンター側の装置、およびゲートウエー装置に対してマルチプロトコル化して対応していく。ここではSIPだけでなく従来のH.323とシームレスに通信できる環境を揃えていく」という。

富士通でもSIPに対する取り組みは